

パートナー
情報誌

香澄 かすみ

Kasumi

～ラインナップ～

1. センターからのお知らせ	1 ページ
2. 世界湖沼会議が閉幕して	1 ページ
3. いきもののにわ雑記	3 ページ
4. 図書紹介	4 ページ
5. 私の細道 (その28)	5 ページ
6. 編集後記	6 ページ

パートナー情報誌 KASUMI 第18号 (通巻56号) 発行日 平成31年1月31日

センターからのお知らせ

□「環境学習フェスタ」 2月16日 (土曜日) 10時から15時30分まで

この催事では、県内で環境活動を行っている生徒・児童による「環境学習発表会」を主催事として、研究室一般公開、工作教室など各種イベントを実施する予定です。当日はパートナーの皆様にご協力いただき、環境学習フェスタを盛り上げていきたいと考えております。御協力の程、よろしくお願ひいたします。

(センター 野澤)



□「パートナー全体研修・交流会」

2月19日 (火曜日) 9時から15時30分まで

自主企画活動を始めたパートナー活動報告会と併せて、活動中にもしものことがあった場合の知識と技能を身につけるための救命講習会を予定しております。途中からの御参加も歓迎です！是非積極的に御参加くださいますようお願いいたします。

(センター 岡村)

「世界湖沼会議は県民と湖沼との関係性を問い直す好機であった」

第17回世界湖沼会議が閉幕した。この会議に関った人の印象はそれぞれ異なることは当然なので、ここでは私的な感慨を述べたい。交流晚餐会で登壇した W・ラスト氏 (国際湖沼環境委員会科学委員長, テキサス州立大教授) は挨拶の中で、「今回の会議は私の知る限り最もエネルギーで、よく組織されていた」と高く評価された。確かに5,500人 (外国人は約360人) もの参加者による国際会議 (発表論文数は約480) が大きな支障なく、最終日まで日程どおり進行したことは素晴らしかったのだが、県民目線で見ると、課題が残ったように思われる。それは普段から環境問題や霞ヶ浦に関心が薄い人々を、もう少し工夫があれば巻き込めたのではないかとということである。この会議のテーマは、湖沼と人



霞ヶ浦セッション (つくば国際会議場)

の共生、湖沼生態系サービスの持続的利用、生物多様性などであり、水質改善をはじめ科学、技術、流域管理、対策などのハード的用語が並び、一般県民に親しみやすいとは言えない。もう少し本会議において、祝祭的な雰囲気を加味し、霞ヶ浦の歴史、文化、民俗、観光、信仰、地域活性化などに焦点を当てるイベント（企画・運営は民間委託へ）があってもよかったかもしれない。実は、これらのテーマは第4分科会で扱われた。この会場は小さかったが、立ち見の参加者もあり、人気があった。しかし発表数は、他の分科会に比べて少なかった。これらのテーマは、これまでの世界湖沼会議で重要視されてこなかった。今回の会議で独立した分科会で扱ったことは前進であったが、転換点になったかどうかは次回メキシコ会議まで待たなければならない。

本会議は型通り進行した感があるが、大きな成功と評価したいのは、延べ約 43,000 人の地元参加者によるサテライト会場の盛況ぶりであった。水戸市千波湖会場、茨城町涸沼会場、鉾田市北浦北部会場、かすみがうら市会場、土浦市会場の5か所のサテライト会場は、環境フェスタを軸に据え、さらに地元の特色を全面に出して盛り上がった。小中高生の研究発表、市民活動発表をふくめて地元住民が多数参加し、特産品の展示や試食コーナーも楽しめた。関連行事として、改めて霞ヶ浦、北浦、涸沼、千波湖など湖沼と水環境の恵みを実感し、郷土愛を育む機会となった。

次に私が評価したいのは学生会議である。約 1,400 人の小中高生が県内をふくめて全国各地から参加し、研究や活動を発表し、意見交換したことは意義深い。次世代を担う若い方々が水環境を扱う国際会議に積極的に参加したことは、今後の成長過程で必ず貴重な経験として役立つことだろう。またサポートした教員や保護者にとっても、子どもたちとともに学び合う、またとない機会となった。

会議の中日の 10 月 17 日（水）には、参加者・関係者併せて 200 人超の方々が霞ヶ浦環境科学センターを、エクスカッションで訪問した。職員、パートナー、ボランティア解説人が対応にあたり、昼食準備、展示室、生き物の庭、実験室などの解説・案内を務めた。女声コーラスグループによる歓迎の合唱もあった。参加者は、湖岸の自然再生地、霞ヶ浦直接浄化実証施設、県流域下水道事務所霞ヶ浦浄化センター、県企業局霞ヶ浦浄水場などの見学の合間に当センターを訪問した。滞在時間は予定よりやや短くなったが、貴重な国際交流の場となった。



エクスカッション霞ヶ浦コース（霞ヶ浦環境科学センター）

今回の世界湖沼会議では、各分科会、霞ヶ浦セッションなどにおいて、多くの専門的な口頭発表、ポスター発表がなされた。それらを通じて、我々県民は、おもてなし精神を発揮して、茨城県と霞ヶ浦の情報を十分に発信できただろうか。こちらから提供するものが多ければ、返ってくるものも多くなる。この会議に限らず、今後、いろいろな場面で「霞ヶ浦」について誰もが積極的に語るができるように、普段から「学習」「経験」を通じて、自信を深めておくことが大切であることを改めて感じた。

（センター 沼澤）



セイタカヨシ

限域と思われ、県の準絶滅危惧種になっています。センターでは「いきもののにわ」再生後に出現し、昨年かから背丈の高い茎が目立つようになりました。湖岸ではH区再生地の東側突堤にも出現していますが、ヨシが群生する低地より高い法面で数ヶ所に群生し、4m程の茎が林立するとまるで竹林のようです。

歩道の南側に並ぶプランターの西端にも、茎先に真っ直ぐ伸びる果穂の軸が残っている背丈の高い植物があります。8月には花穂を付けるワセオバナです。秋の七草の一つで尾花と呼ばれるススキが、右側で白い果穂を付けています。ワセオバナは名前にオバナと付きますが、ススキと違いサトウキビ属の植物で、関東以南の太平洋岸に分布します。霞ヶ浦沿岸では野外講座で行った浮島、玉造、神栖で群生が見られました。

また、上池周囲の湿地にはヨシと共にオギが生育します。初冬には葉や茎は枯れていますが、まだ果実散布し



オギ

年の瀬の整備活動後のすっきりした「いきもののにわ」に、緑色の葉を鋭角に斜上させ青空へ向かって伸びている数本の茎があります。茎頂にヨシと似た果穂を付け、その名もセイタカヨシです。

これが生える湿生植物コーナーには、霞ヶ浦湖岸植生の主な構成種で環境学習の教材の一つであるヨシもあります。ヨシは先が垂れる葉身を開出し、既に緑色が抜け白っぽく見えます。一方、セイタカヨシは例年1月頃まで緑色の葉を付けています。また、地上茎の一部が残り節から新梢を出すこともあります。世界文化遺産に指定されている中国西湖に因むセイコノヨシという別名を持ち、アジア・オーストラリアの暖温帯から熱帯に分布する暖地性の植物です。

沖宿湖岸周辺が北



ワセオバナ、ススキ

ている様子が見られました。東になって出る穂がススキによく似ていて遠くから区別するのは難しいのですが、白い毛が長くふさふさして、ススキの穂にある「く」の字に曲がった芒がありません。ススキはやや乾燥した所に株になって生えますが、オギはヨシと同じように長い地下茎を持ち、湿った場所に一本立ちで群生します。ウエットランドとして整備されている川尻川近くのK区低地に、オギが群生しています。晩秋、熟した穂が銀色になって風になびく光景が見られます。(パートナー 二階堂)

図 書 紹 介



平成30年4月～12月までにセンター文献資料室で新しく購入された図書は143冊でした。その内パートナーにより図書紹介された本は下表の15冊です。図書紹介の内容につきましては、2階交流サロンに有る「図書紹介一覧」ファイルをご覧ください。

また、文献資料室にはパートナー活動などの参考になる図書が、多数あるかと思しますので是非、ご利用ください。

書 名	著 者 名	出 版 社
ニッポンのじてんしゃ旅 Vol.03 いばらきサイクリングガイド		八重洲出版
五感で楽しむ蓮図鑑	高畑 公紀	淡交社
日本のインフラ1 水のインフラ	伊藤 毅	ほるぷ出版
スイカのタネはなぜ散らばっているのか	稲垣 栄洋	草思社
菌の絵本 なっとう菌	木村 啓太郎	農山漁村文化協会
楽しくなっちゃう おはなし16話	カワダ クニコ 他	小学館
人類と気候の10万年史	中川 毅	講談社
地球	加古 里子	岩波書店
科学のお話『超』能力をもつ生き物たち ハスの葉がつくったよごれない服	石田 秀輝	学研
科学のお話『超』能力をもつ生き物たち ホタルがつくったエコライト	石田 秀輝	学研
せきらんうんのいっしょう	荒木 健太郎	ジャムハウス
わけがわかる中学理科	学研プラス	学研
生態系と自然共生社会	小宮山 宏	東大出版会
ブラタモリ1 長崎 金沢 鎌倉	監修：NHK「ブラタモリ」制作班	角川書店
ブラタモリ2 富士山 東京駅 上田・沼田	監修：NHK「ブラタモリ」制作班	角川書店

(パートナー 浅野)

「私の細道」(その28) 石の巻

恥ずかしい話であるが、私は東日本大震災の後6年も経過して、初めて、なお生々しく残る悲惨な跡を、この「私の細道」の道中で目の当たりにした。この一連の旅のはじめは平成23年(2011)5月16日であり、大地震の2ヶ月後、まだ被災現場がそのまま残されている時であった。茨城でも災害の爪痕は各地で認められ、福島原発被害が日々深刻度を増している時であった。私が石巻を訪れたのは平成29年(2017)6月22日であった。

年月の流れの中、芭蕉を求めみちのく行は、福島でも中通りで津波被害の大きかった浜通りからはずれてはいた。しかし、この道を辿る中で被災の跡や修復されているところは各地にあった。私はこの旅であえてそのことに触れてはこなかった。ひたすら芭蕉行に拘った節がある。しかし、今回、かつて芭蕉と曾良が立ったという日和山からの眺めは、まさに津波が海辺や河川の家並を全て浚っていった跡であった。あれからもう6年が経っていた。津波前の町並が写真で掲示されており、それに当たる全てが草地になっていた。

その日、松島から三陸自動車道経由で石巻に着いた私は、芭蕉の情報を得ようと、まず、市役所の観光課を訪ねた。役場の通路には多くの住民が詰め掛けており、観光課の並びに住宅再建支援の立て札を見た。津波被災支援の住民相談がなされていたのだ。場違いを恥じながら芭蕉の話を切り出すと担当の方は丁寧に応えて下さり、日和山に芭蕉像のある旨の説明を受けた。こそこそと退出して日和山に向かい、山頂近くの茶房に立ち寄った。マスターに津波の話を聞こうとしたが多くは語ろうとしなかった。そして、山頂よりの景に息を呑む思いがした。

芭蕉と曾良は元禄2年5月10日(陽暦1689年6月26日)、松島から、高城 → 小野 → 矢本新田を経て、小雨の中を石巻に着き、日和山に登っている。芭蕉は、12日に平泉への道を間違えて石巻へ来てしまったと記しているが、日付も含めて創作で、曾良の随行日記によると予定の行動だったらしい。

日和山に立った芭蕉は、眼下に広がる港の賑わいと、はるかかなたの海や山、北上川沿いの歌枕になっている処を眺めたのであろう。「おくのほそ道」には、見えないはずの金華山まで見たと書き、「数百の廻船入江につどひ、人家地をあらそひて、竈の煙立ち続けた」と記している。この繁栄した港町が、三百年後に津波に浚われることになるとは思っても及ばなかったことであつたらう。

その日、芭蕉らは石巻までの道中で、喉の渇きを癒す湯の世話をしてくれた通り掛かりの武士の計らいで、「四兵衛」の営む旅籠屋に泊ることが出来た。翌11日、北上川に沿って平泉を目指して一関街道を北上する。石巻 → 鹿又 → 飯野川 → 柳津 → 登米の経路であり、柳津までは道案内ともなった同行者がいたようである。そして登米で宿をとり、12日は更に北上し、登米 → 上沼新田 → 湧津 → 金沢 → 一関へと歩を進めている。登米では不審者がられたらしく宿屋(儀左右門)では断られ、宿場役人(検断:庄左衛門)に頼み込んで、役人の家に泊した。



芭蕉・曾良立像(石巻日和山)



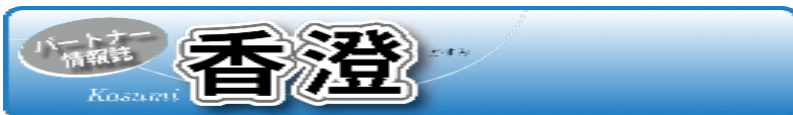
芭蕉一宿の跡碑（登米）

この碑は河東碧梧桐の字であるという。碧梧桐は正岡子規の門下で高浜虚子との双璧であったが、子規の死後、虚子とは袂を別ち、新傾向俳句へと突き進む。その切っ掛けとなる全国行脚をし、詳細は彼の著作「三千里」に纏められている。芭蕉の「おくのほそ道」の跡も追っており、明治39年（1906）11月～12月に、石巻―登米―平泉と訪れている。芭蕉らは登米で1泊したのみであったが、碧梧桐はここで9泊し、地元の俳人と句会をしつつ滞在している。

蕩々と流れる北上川。この流れを見つつ、芭蕉と曾良はいよいよ次の憧れの地、平泉へと向かう。
(パートナー 小松)

石巻を後にした私は北上川に沿って国道45号線、更に柳津から342号線を北上し、登米町にある役場支所を訪ねた。芭蕉の話を切り出すと、隣接する中田町の支所を紹介され、そこで、文化財文化振興室の若い担当者と面談する事が出来た。氏は、「津山町史」「登米町史」「中田町史」の松尾芭蕉の項を抜粋コピーして下さり、柳津から登米への行程や登米での芭蕉ゆかりの碑について説明を受けた。そして、紹介された北上川土手にある「芭蕉翁一宿の跡」碑に向かった。登米大橋の傍、夏鶯の啼くなかに碑は置かれていた。こ

<編集後記>**



12月には、地球規模の異常気象を抑制しようとする、気候変動枠組み条約第24回締約国会議(COP24)が、開催された。パリ協定実施ルールの採択という、一定の成果があったと評されるが、排出国として、牽引するべき大国の、化石燃料への依存、回帰により、'16、'17年の温室効果ガスの排出量は、増加傾向にあるという。実効性のある手だてへの合意は見いだせるのだろうか。

成功の裡に閉幕した世界湖沼会議においても、単に学術成果を披歴する場に留まらず、環境に対する意識の高揚と保全活動の拡大に繋がるよう、全ての利害関係者が、最適解を求めて務めを果たすことで、霞ヶ浦が江戸時代以降歩んだ結果として、これ以上毀損させることなく、自然の恵沢を時代に即した健全な形で、維持継承していくことが、持続可能な開発目標の要素として合致するのではないのでしょうか。
(パートナー 栗原)

「香澄」編集委員会：浅野明宏，尾形孝彦，廣原毅，有吉潔，栗原繁，岡村裕美，樽見博文